

# 父被爆体験伝承 磐田の2世模索

広島市は6日、73回目の「原爆の日」を迎えた。関係者の高齢化が進み風化が懸念される中、被爆者の子どもたちが平和への願いを受け継ぐ取り組みを活発化させている。「原爆の記憶を引き継ぐか、失うか。今はまさに岐路にある」。静岡県原水爆被害者の会の二世部会代表磯部典子さん(67)は、磐田市安久路は、国内各地の被爆2世と交流を深めながら、親が見た悲惨な光景を次世代に伝える方法を模索する。(社会部・岩下勝哉)

## きょう広島原爆の日

磯部さんの父杉山秀夫さんは22歳の時、爆心地から1・2キロ離れた場所で被爆した。かろうじて生き抜いた後、もがんで度々発症し、

87歳で死去した。磯部さんは非核化を訴え続けた父の被爆体験を、静岡県内の高齢者サロンや学校で語り部として伝えている。磯部さんは4日、広

## 国内の「仲間」と交流、学び



被爆した親の体験の継承に向けて意見を交わす磯部典子さん(左)や古田光恵さん(中央)ら=4日、広島市中区

島市内で広島県原爆被害者団体協議会副理事長の古田光恵さん(71)らと、市内各町の被爆2世の人たちと、親の被爆体験をどう伝えていくかについて意見を交わした。古田さん

は同市主催の3年間のプログラムを修了し、被爆者の代わりに体験談を話す「伝承者」を務める。

被爆者2人の体験談や、33歳で被爆した自身の父親の経験を広島市内で紹介している古田さん。「言葉から当時の情景を想像してもらおうように意識している」と話し、「悲劇を繰り返さぬために、凄惨

(せいさん)な被害を見てきた磯部さんも役割は、ますます重要伝えていく」と強調し「原爆の恐ろしさを身にならなくては」と表情。病気に苦しむ父を近く感じてきた2世のを引き締めた。